

国立国語研究所学術情報リポジトリ

The Current Situation and Changes in the Japanese Spoken in the Tokyo Metropolitan Area from a Regional Language Viewpoint

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-10-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 三井, はるみ, MITSUI, Harumi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00000740

地域語の観点からみた首都圏の言語の実態と動向の一側面

The Current Situation and Changes in the Japanese Spoken in the Tokyo Metropolitan Area from a Regional Language Viewpoint

三井 はるみ (MITSUI Harumi)

1. はじめに

首都圏（東京を中心とする都市圏、ほぼ1都3県のエリア）の言語は、そこに生まれ育った人の日常語であると同時に、全国、世界から人の集まる都市の言語であり、標準語の基盤となる基準性を求められる言語でもある。人口の流動性、情報と物の流通量の多さ、社会的多様性により、新しい事象が生じやすく変化も早く、社会的サブグループによる違いも目立つ。このような首都圏の言語の全体像を見通すことは容易ではなく、いずれの観点から切り込んでも、常に「それは一部に過ぎない」という不全感がぬぐえない。特に地域の日常語としての方言は、共通語との明確な違いが捉えにくいこともあって影が薄く、首都圏内にことばの地域差があるということも、現在一般にはほとんど意識されなくなっている。

そのような中で、本稿ではあえて、地域の中の方言の観点から首都圏内の一エリアの状況を取り上げてみたいと思う。対象とするのは、東京23区の西側に位置する多摩地域である。東京都の人口約1323万人のうち、多摩地域（島嶼部を除く23区以外の東京都）には約420万人が居住する（2012年現在）。人口の流入は多く、共通語化はいち早く完了し、特に若年層にとって「方言」は、基本的には「どこかよそのことば」である。このような中で、一部の残存した在来方言が、地域性の表象として利用されるケースが現れてきた。この事例を通して、首都圏地域における地域語の一側面を見てみたい。

2. 在来方言の地域資源としての利用

全国的な「方言の価値の上昇」の時代の中で、従来地元方言の存在意義が意識されにくかった首都圏西郊多摩地域でも、近年、地元の在来方言をネーミングやキャッチフレーズに利用する例が見られるようになってきた。

- (1) 地域でいちばんのめっこい信用金庫（青梅信用金庫キャッチフレーズ、本店：青梅市）
（図1）
- (2) ふんごまっしええ！ 武蔵村山へ！（ウォーキングイベント、武蔵村山商工会、2010年10月16日）（図2）
- (3) うまかんべえ～祭（東大和市グルメコンテスト、第1回：2012年4月28日）



図2 ふんごまっしええ! 武蔵村山へ!
(2010年9月, 多摩都市モノレール車内)

図1 地域でいちばんのめっこい信用金庫
(2011年6月, 青梅信用金庫玉川上水支店)

- (4) 来さっせえ 奥多摩 (奥多摩観光協会ニューズレタータイトル, 2007年創刊)
- (5) おこじゅ, おっぺし餅 (和菓子の商品名, (有)紀ノ国屋, 本店: 武蔵村山市)
- (6) あしっこ (立川市立第九小学校周年記念誌タイトル, 100周年: 1980年, 130周年: 2002年)

地域の人に向けて,あるいは来訪者に向けて,地元らしさを示しながら,親しみや身近さの雰囲気を醸し出すこのような使われ方は,方言主流社会では以前から見られたものだが(日高1996他),共通語中心社会である首都圏では,必ずしも目立つものではなかった。さらにこれらの単語や表現は,すでに大方の人々の日常の生活の場で用いられなくなって久しく,住民に転入者の割合が高いことと相まって,受け手にとっては全く初めて目にするこゝたであることも珍しくない。むしろそのことが新鮮味につながり,利用価値を高めていると考えられる。つまりこの現象は,地域の在来方言が,地域を表象する利用可能な資源として再発見され,再生利用が行われるようになったもの,と位置づけることができる。近年指摘されている「フォークロリズム¹による方言の利用」(日高2009),「コミュニケーション・ツールとしての「ジモ方言」²の使用」(田中2011)にあたる事例である。

このように地域資源として再生利用される在来方言(俚言)として,特に「のめっこい」というこゝたが目に付く。

¹ 民俗文化が本来のコンテクスト(文脈)を離れて見出される現象(日高2009)。

² 生育地で使用されている「方言」であるものの,自分自身の方言としては使用せず,自分より上の世代である両親や祖父母世代の使用方言として見聞きしているもの(田中2011:19)。

- (7) 地域でいちばんのめっこい信用金庫（青梅信用金庫，2007年度～）³ = (1) 再掲
 (8) 元気の種まき～みんなでのめっこく～（日の出町総合健康事業，2010年度～）
 (9) のめっ恋まち東村山～自然・歴史・文化があふれ，人と人があふれあうまち～（東村山市観光振興プランキャッチフレーズ，2012年3月策定）
 (10) のめっこい料理めしあがれ（奥多摩町地域誌『たまもの』2，特集タイトル，2009年4月）
 (11) 丹波山温泉 のめっこい湯⁴（山梨県丹波山村営の温泉施設名，2000年4月26日営業開始）

ここでは，この「のめっこい」という語を代表例として取り上げ，①在来方言の再生利用の実態と背景（3節），②再生利用によって生じる新たな受容と変容の兆し（4節），の二点について報告する。資料は，この語に関して行った4種の小調査，①意味・用法に関する方言集調査，②多摩地域とその隣接地域における利用例調査，③受容と理解に関するWeb調査，④受容・理解・イメージに関する首都圏大学生アンケート調査の結果による。

3. 「のめっこい」の意味・用法

3.1 多摩地域の方言集から

はじめに在来方言での「のめっこい」の意味を確認する。「のめっこい」は主として関東西部に分布する⁵形容詞で，「手触りがなめらかである」「口当たり・喉ごしがなめらかである」という接触感覚に関する意味（〈接触感覚〉の意味）と，そこから派生したと考えられる「人間関係が円滑である，親しい，親しみがある」という抽象的な意味（〈人間関係〉の意味）を併せ持っている。図3は，多摩地域（隣接地域を含む）の方言集に記載されている「のめっこい」の意味を地図上に示したものである。以下に記述例を挙げる。

- (12) のめっこい：なめらか。「夕べいっぺえ飲んだら，今朝がた，顔がのめっこいや。」（鈴木為佐生（1987）『立川の方言』立川市教育委員会）【立川市】
 (13) のめっこい：人付き合いがいい。仲がよい。「のめっこくやってるってえ話だで」（武蔵野市開発公社（2009）『武蔵野界隈むかし語り』）【武蔵野市】
 (14) のめっこい（形）①表面がなめらかである。つるつるしている。②人間関係がうまく行っている。円滑である。「あの人はのめっこいからその話は俺の方からしとくべー。」（関谷和（2004）『子どものころ聞いたことば話していたことば（増補・改訂

³ 同信金理事長のインタビュー記事である森田（2007）には，キャッチフレーズとして「のめっこい」を導入した経緯が述べられている。「地域との結びつきを深める」という経営姿勢を地元方言でシンボル化することの意義，それによって期待されるインパクトやメリットに触れており，地域資源としての方言の再生利用の明確な意図がうかがわれる。

⁴ 促音を含まない「のめっこい」は諸方言集には記載がない。施設名とする際に語形の方言らしさを薄めたものと見られる。のめっこい湯公式サイトには，「【のめっこいとは？】…「のめっこい」とは丹波山村の方言で「ツルツル」「スベスベ」という意味です。」（<http://www.nomekoiyu.com/index2.html>，2013年8月8日閲覧）とあり，説明中の語形は促音を含む「のめっこい」である。

⁵ 『日本方言大辞典』で「のめっこい」の使用地域として挙がっている都県は，秋田，栃木，群馬，埼玉，東京，神奈川，山梨である。



図3 多摩地域の方言集における「のめっこい」の意味

版)】【埼玉県入間市】

〈接触感覚〉の意味のみを載せるもの((12)),〈人間関係〉の意味のみを載せるもの((13)),両方の意味を載せるもの((14))がある。ただしこれが地域差を反映したものと即断できない。2010~2011年に立川市内生育の60~80歳代の話者4名に確認したところ、70~80歳代の話者は、「のめっこい」ものの典型として、「白くてきめの細かい肌」を挙げた上で、「仲がよい、話しやすい」といった人間関係に関する使い方にも「違和感はない」とのことであった。檜原村生育の80歳代の話者2名(2012年確認)もほぼ同様であった。一方立川市の60歳代の話者は、この語は上の世代が使うのを聞くといい、使うとすると「うどんの喉ごしがよい」ことにほぼ限られる、とした。〈接触感覚〉の意味から〈人間関係〉の意味が派生する一方で、この語自体の使用が衰退して意味も退縮し、その中で、〈接触感覚〉の中のさらに特定の状況へと意味の限定が生じていることがうかがわれる。

3.2 多摩地域の市町議会会議録から

方言集では、〈接触感覚〉〈人間関係〉2つの意味のうち、前者を挙げるものの方が件数としては多かった。一方キャッチフレーズ等では、〈人間関係〉の意味で用いられているものがほとんどである。実際の使用傾向はどのようなのだろうか。

「のめっこい」は、方言形(俚言)でありながら、市町村議会のような、地域の公的な場でも使用されることがある。市町議会会議録には、次のような例が見られる⁶。

⁶ Web上で公開されている、各市町議会会議録検索システムにより、検索を行った。

- (15) 補助金は一種の潤滑剤、一滴の油によって、極めて動きがのめっこくなったり、こすっばくなったりいたします。(1996年9月19日 東村山市議会平成8年9月定例会 小町佐市議員 1938年生)
- (16) (保育園民営化の説明に対して) 近隣にはこのことがありますよという話は早めにしておかないとのめっこいかないのではないかと思うので、その辺の考えをお願いいたします。(2010年3月29日 福生市議会平成22年全員協議会 小野沢久議員 1946年生)
- (17) 私が言っているのは、せめて町の下に活断層がありますよと、そういう情報提供をもうちょっとのめっこやった方がいいんじゃないかと、そういう発言のあれなんですよね。(2008年12月3日 瑞穂町議会平成20年6月定例会 上野勝議員 1948年生)
- (18) (学校の教職員の) 異動というものは本当に怖いもので、我々がしっかりとのめっこくなつたなあという、のめっこいというか、そういうことですね。のめっこくなつてきたなあというふうになってきたときに、サッと異動してしまうという、この危うさがあるわけです。(2010年3月23日 武蔵野市議会平成22年予算特別委員会 近藤和義議員 1947年生)

(15) のように物理的ななめらかさに近い意味で用いられている例もあるが、ほとんどは、(16)~(18) のように、地域社会における〈人間関係〉に関する用例である。(16) は「関係が円滑」、(17) は「きめ細かく」、(18) は「懇意」といった意味であり、(16)(17) はそれぞれ〈接触感覚〉の意味から、(18) は(16) のような意味からさらに派生したものと考えられる。キャッチフレーズ等において〈人間関係〉の意味での使用例が多いことには、このような使用状況の素地がある。

3.3 「のめっこい」の意味・用法と方言利用

「のめっこい」という語は、他の方言形同様全体としては使用が衰退し、その中で意味が一部の食感に限定されていく傾向が見られる。一方、派生義である〈人間関係〉の意味は、地域の生活の中で重視される「密な付き合いに基づいて人間関係をスムーズに運ぶ」という行動規範を余すところなく表現するものである。そのため、このような話題が取り上げられやすい場（典型的には、地元出身者を中心とした地域の会合）では、相対的に使用頻度が高くなる。他の表現に代え難い場合もあるようである（例(18)参照）。こういった使用状況のもとで、「のめっこい」は、地域の人間関係の親密さを積極的に表す語として見出され、キャッチフレーズ等として前面に押し出されて利用されるようになったものと推測される。

地域資源としての方言利用を含む、現代社会における方言の意識的な活用の背景には「コミュニケーションを円滑で温かみのあるものにしたという関係者の意図が潜む」という指摘がある（小林 2007: vii）。「のめっこい」の〈人間関係〉の意味への拡張は、このような機能を意味そのものとして直接的に体现していると見られる点、興味深い。

4. 首都圏若年層の現状と今後の動向

キャッチフレーズ等として取り上げられることによって、「のめっこい」ということばは、本来この語を使用していなかった人々の耳目に触れる機会が増加した。Web上の記事の検索結果（2011年5～6・12月、2012年1月）によると、この語を認知し新たに使用する人が現れる兆しがある。一方、実際の使用場面には触れないことから、意味が不確かであり、与えられたわずかな文脈を元に、独自に再解釈して使用する例も見られる。

現在「のめっこい」という語に現れている、このような限定的な接触機会の増加と用法の変化の兆しは、一時的な現象に止まるだろうか。それとも、1980年代に多摩西部地域から広がった「うざったい」のように、今後使用者・使用地域が拡大していくだろうか。拡大する場合、それに伴って意味の面ではどのような変容が生じるだろうか。

このような今後の動向に関し、現時点で変化の方向を予測し、もし変化が進行していく場合には、その動きを追跡する起点とするために、「のめっこい」と関連語について、受容・理解・イメージに関する首都圏大学生アンケート調査を行った⁷。

それによると、「のめっこい」ということばを知っているかについては、回答者356名中、「知っている」と回答したのは1名のみであった。この回答者の出身地は新潟県で、祖父母から聞いて知っているが、自分では使わない、という。多摩地域由来の「のめっこい」は、現在首都圏の大学生には知られていないことが確認された。次に「のめっこい」ということばを使ってみたいか尋ねたところ、この語を知っている1名を除いた回答は、「使ってみたい63名(17.7%)」「使ってみたいくない123名(34.6%)」「わからない169名(47.5%)」(無回答1名)であった。知らないことばであるにもかかわらず、17.7%もの回答者が「使ってみたい」と回答しており、この語に触れる機会があれば使用が広まる可能性がうかがわれる。さらに、「のめっこい」ということばはどんな感じがするか」6つの評価語から当てはまるものをすべて選んでもらったところ、「古くさい181名(50.8%)」「新しい12名(3.4%)」「おもしろい186名(52.2%)」「おもしろくない4名(1.1%)」「心地よい24名(6.7%)」「不快な80名(22.5%)」と、「古くさい」と「おもしろい」がいずれも過半数となった。両方を同時に選択した回答者も71名(19.9%)いる。「古くておもしろい」という価値観がこの語の採用を後押しする可能性がある⁸。

なお、本節冒頭で触れたように、「のめっこい」という語は、本来とは違った意味で受け取られている可能性がある。この点について、以上とは別の首都圏3大学の学生314名に、「のめっこい」はどういう意味だと思うか」自由記述で回答してもらった(2011年7月実施、携帯メールによる回答。【調査B】とする)。単語のみを提示し、文脈は示していない。その結果を表1に示す。本来の意味である「なめらか」という回答はわずか7名(2.2%)、「親

⁷ 2011年6～7月に、青山学院大学、慶應義塾大学、國學院大學、専修大学、日本大学、文教大学で実施した。配布・回収には、「首都圏言語」プロジェクトのメンバーの協力を得た。この項目の有効回答者数は356名。うち、首都圏1都3県(東京・神奈川・埼玉・千葉)出身者は218名。【調査A】とする。

⁸ この採用態度は、2節で取り上げた在来方言の再生利用とは異なり、「方言おもちゃ化」に基づく「ニセ方言」の使用態度と共通する(田中2011:31)。

しい」は0名であり、最も多かったのは「かわいい」であった⁹。また、「ヌメヌメ」「ヌルヌル」「ネバネバ」など粘着性の不快な接触感覚の意味が上位を占めた。3位の「しつこい」、5位の「のろい」、7位の「面倒くさい」もすべて不快感情を伴うマイナスの評価語である。【調査A】の「『のめっこい』はどんな感じがするか」で、「不快な80名(22.5%)」が「心地よい24名(6.7%)」を上回って約1/4を占めた背後には、このような意味解釈があるものと推測される。さらに、もしも今後若年層でこの語の使用が広がることがあった場合、本来の意味と異なる「かわいい」または、不快な感覚感情を表す語として再出発することが予想される。

表1 「のめっこい」の意味

	意味	人数	%
1	かわいい	47	15.0
2	ヌメヌメしている	39	12.4
3	しつこい	25	8.0
4	ヌルヌルしている	24	7.6
5	のろい	17	5.4
6	ネバネバしている	13	4.1
7	面倒くさい	9	2.9
8	飲みにくい等(音の類似)	8	2.5
9	ぬるい	7	2.2
9	なめらか	7	2.2
9	のめり込みやすい	7	2.2
	(異なり 62)	314	100.0

(自由記述回答をグルーピング、上位11種を掲出)

5. 地域語の観点から見た首都圏の言語

以上、「のめっこい」という語を代表例として取り上げ、首都圏における地域資源としての方言利用の実態の一端について報告を行った。本稿はたった1語を扱ったケーススタディに過ぎない。しかしここには、共通語化が早く徹底的に進み、方言の存在価値があまり意識されることのなかった首都圏西郊地域が、「方言の価値の上昇」の時代の中で、どのように地域の中の方言に対しての現状の一端が如実に現れている。

もとより、方言の地域資源としての活用のあり方は、首都圏内部でも一様ではない。このことについては、本プロジェクトにおいて、別に、首都圏全市区町村の行政、教育委員会、商工会への悉皆通信調査を行い、現在公表の準備を行っている。また「のめっこい」のような残存方言だけでなく、若年層が日常的に使用する地域語についても分布調査を実施し、多くの項目で東京都区内にはっきりとした地域差があることを確認している¹⁰。さらに、流行語を中心とした若者言葉を地理的分布の観点から分析し、特徴的な分布パターンについて検討を行っている(鎌水 2013)。さらにこれらのような気づかれやすい、目立つ言語事象だけでなく、ほとんど気づかないうちに変化が進み、新しい共通語として発信されることになったことばにも目を向けている(三井 2011)。

1節で述べたように、首都圏の言語は多様性、重層性に富み、常に変化にさらされている。

⁹ Web上に例が見られる。「『のめっこい』とは青梅の方言で、親切とかかわいいという意味らしいです。」(牛屋の店「のめっこい」2009年4月6日の記事, <http://ameblo.jp/ushiya3/entry-10237451346.html>, 2012年1月8日閲覧)。

¹⁰ 「首都圏大学生の言語使用と言語意識の地域差に関する調査」。この調査の概要・調査票及び調査結果は、プロジェクトサイトで公開している。http://www.ninjal.ac.jp/shutoken/1_summary.html

そのような中で「地域の日常語」としての首都圏のことばの実態と動向を把握し、それが、都市言語としての首都圏のことば、標準語の基盤である基準言語としての首都圏のことばとどのように関係し合いながら存在しているのか、究明していきたいと考えている。

●付記●

本稿は、社会言語科学会第29回研究大会（於：桜美林大学、2012年3月11日）におけるポスター発表、「首都圏における在来方言の地域資源としての再生の一事例—多摩地域の「のめっこい」を例として—」の内容の一部に修正を加えたものである。発表に有益なコメントをくださったみなさま、また、研究開始当初から多くのサポートをくださったプロジェクトメンバーのみなさまに感謝いたします。

●参考文献●

- 日高貢一郎(1996)「方言の有効利用」小林隆・篠崎晃一・大西拓一郎(編)『方言の現在』362-384. 東京：明治書院.
- 日高水穂(2009)「秋田における方言の活用と再活性化」『月刊言語』38(7):24-31.
- 小林隆(2007)「方言機能論への誘い」小林隆(編)『シリーズ方言学3：方言の機能』v-viii. 東京：岩波書店.
- 三井はるみ(2011)「関西方言出自の共通語「～てほしい」の普及とその背景」プロジェクト共同研究発表会(2011年2月25日、国立国語研究所)発表資料.
<http://www.ninjal.ac.jp/shutoken/5-1-0.pdf>
- 森田昇(2007)「“のめっこい”がキーワード—信用金庫に徹し格好いいことをやる必要もない—」『財政金融ジャーナル』7:14-17.
- 田中ゆかり(2011)『「方言コスプレ」の時代』東京：岩波書店.
- 鐘水兼貴(2013)『首都圏の言語の実態と動向に関する研究 全国若者語調査地図集』(国立国語研究所共同研究報告12-04). 東京：国立国語研究所.

《要旨》 地域語の観点からみた首都圏の言語の実態と動向の一側面として、在来方言の「のめっこい」という語が地域資源として再生利用される事例を取り上げた。この語は日常生活ではほとんど使われなくなっているが、地域の間人関係の親密さを積極的に表す語として、キャッチフレーズ等に多く用いられる。「なめらか」という〈接触感覚〉の意味と、「親しい」という〈人間関係〉の意味を併せ持っており、後者は前者から派生したと考えられる。さらに、「地元らしさを示しながら、親しみや身近さの雰囲気醸し出す」という地域資源としての利用と連動するように、親しい人間関係を表す意味によりシフトしている様子がうかがわれる。キャッチフレーズとして利用されたため、限定的ではあるが、この語を知らなかった人が、この語を認知し使用する兆しが見られる。若年層に対する意識調査によると、ほぼ全員がこの語を知らないが、2割弱の回答者が「使ってみたい」とし、「古くておもしろい」とする価値観が使用を後押しする可能性が見られた。ただし、本来の意味を理解している人はほとんどおらず、全く異なった意味で受容されていることがわかった。今後の動向が注目される。

Abstract: To illustrate one approach to research on the Japanese currently spoken in the Tokyo metropolitan area, I investigated the dialectal word *nomekkoi* used in the Tama area. This word is old and hardly ever used in everyday life, but it does occur in catchphrases to indicate intimacy in human relationships in the Tama area today. It has the <tactile sensation> meaning 'smooth' and the <human relationship> meaning 'intimate,' and the latter was derived from the former. The meaning has shifted in connection with a desire to "create an atmosphere of familiarity or closeness while displaying local identity," and there are indications that its use in catchphrases has led an increase in the number of people who know it. A survey of younger speakers showed that although the great majority do not know the word, nearly twenty percent said, "I would like to use it" because "it is old and interesting." However, the survey also showed that the most of these respondents ascribed a meaning to the word that is completely different from its original meaning. It will be interesting to see how the situation changes in the future.

三井 はるみ (みつい・はるみ)

国立国語研究所理論・構造研究系助教。文学修士（東北大学）。昭和女子大学講師，国立国語研究所主任研究員を経て，2009年10月より現職。

主な著書・論文：『方言文法全国地図』3～6（共編著，国立印刷局，1993・1998・2002・2006），「極限のとりたての地理的変異」（『日本語のとりたて—現代語と歴史的変化・地理的変異—』，くろしお出版，2003），「方言データベースの作成と利用」（共著，『シリーズ方言学4：方言学の技法』，岩波書店，2007），「条件表現の地理的変異—方言文法の体系と多様性をめぐって—」（『日本語科学』25，2009），「方言と共通語のはざまで—生き残り，生まれ，広がる方言—」（『三色旗』752，2010）。

萌芽・発掘型共同研究プロジェクト「首都圏の言語の実態と動向に関する研究」

プロジェクトリーダー 三井はるみ

（国立国語研究所 理論・構造研究系 助教）

プロジェクトの概要

東京首都圏の言語は，次の2点で，日本の他の地域の言語と異なる社会的位置づけを有する。(1) 標準日本語の基盤であること。(2) この地域で生じた新たな言語現象は，ほどなく全国に波及すること。一方地域方言としては，次のような大都市特有の状況に置かれている。(3) 伝統的地域方言が保持される社会的基盤がきわめて脆弱なこと。(4) 日常的に，言語的多様性にさらされる状況にあること。(5) 言語規範の異なる多数の社会的サブグループが存在すること。

以上の特質を踏まえて，東京首都圏の言語状況を多面的に把握し，この地域の言語を対象とした総合的な研究の基盤を築くことを目的とする。なお本研究における「首都圏」とは，東京を中心とする日常的な言語接触が生じうる都市圏を想定しており，おおむね，東京都・埼玉県・千葉県・神奈川県の上3県の範囲と重なる。